

〔学会企画シンポジウム報告〕

ガヤと霧社事件

タクン・ワリス (Takun Walis 邱建堂)

(魚住悦子訳)

はじめに一楽しかった「ガヤ」の時代—

第1節 強権の進入—われわれはいつい、誰のために戦うのか

第2節 「モーナの遺体」を故郷に迎える—民族の歴史にはじめて涙する—

第3節 「姉妹が原事件」と「和蕃結婚」政策

第4節 牛馬のような使役と横暴な統治

第5節 事件を経験した人々の記憶の連繫

第6節 人々の心を引き裂いた「蕃を以って蕃を制す」策略

まとめ—「ウットフとガヤの部落」対「日本の天皇と国家」—

(要約)

日本による統治以前、セデック族はともにウットフを崇め、ガヤを守って暮らしていた。しかし、自分が育った時代の清流(川中島)では「部落意識」が混乱していた。祝宴のあとで女性たちがいつも悲しい歌を歌うのを耳にし、かつて悲惨な事件が起きたことは知っていたが、霧社事件について知ることになったのは大学生になってからであった。日本人は「姉妹が原事件」と呼ばれる「毒殺事件」を通じて霧社に侵入し、ガヤを乱した。霧社事件も、頭目と長老が部落に共通することがらを決定するガヤが乱れていたからこそ青年たちの憤りを引き金として生じたものであり、鎮圧の過程でさらに同族は互いに首を打ち合ってはならないというガヤに反した行為が行われることになった。しかし、今日では、われわれセデックの三つの方言グループは、手を携えて未来を創ろうとしている。

はじめに一楽しかった「ガヤ」の時代—

わが民族はセデック Seediq¹と自称している。「セデック」は「人」の意味である。タックダヤ Tkdaya のほかに、タウツァ Toda²とトロック Truku の方言を話すグループ³があり、数千年にわたって台湾中央山脈の中部にある霧社地区で悠然と暮らしてきた。台湾に古くから住む原住民族のひとつである。日本による統治以前には、セデック族は、北は強悍なタイヤル族と接していた。言語学者は、千年以上前には、セデック族はタイヤル族と同じ民族だったと推論している⁴。セデック族は、南は、勇猛なブヌン族と萬大南溪を境として接し、1814年⁵、埔里地区の原住民が漢人に虐殺されたのちは、西南は移住してきた平埔族と接していた。

そのころはまだ部落時代⁶で、どの民族にも出草して首を狩る習慣があり、それぞれのエスニックグループ⁷は緊張した関係にあって、行き来することはなく、それぞれの伝統領域に閉じこもっていた。セデック族は「人は死んでも、靈魂は滅びない」と堅く信じており、昔からウットフ⁸ Uthx (すべての人の霊を指す)を崇め、エスニックグループのガヤ Gaya (文化と社会の規範で、エスニックグループが生きるための法則)を守っていた。それを書き記す文字はなかったが、人々がともに遵奉していた規範だった。ガヤの法則はわがセデック族の豊かで奥深い言葉

のうちに生きている。セデックの人々は誰もが民族の言葉に通じており、ガヤをよく知っていた。人々は、ガヤに背いたものは必ずウツフに罰せられると堅く信じており、農耕や狩猟、出草、病気の治療、親族関係、個人と部落や各部落間の関係など、すべてについて、厳しいガヤがあった。ウツフを敬い、ガヤを守っていた部落時代には、人々は部落の長老の生存の経験に基づいて、エスニックグループを発展させてきた。狩場をめぐる紛争や、よその民族にいつ首を狩られるかもしれないという恐れから、「部落意識」が人々の中心的な価値となり、強固で団結した戦闘生活集団をつくりあげて、自分たちの明確な伝統領域をしっかりと守ってきた。

日本による統治以前は、われわれセデック族は国家による統治を受けたことはなかった。長い間、四方を強敵に囲まれてはいたが、セデックの三つの方言グループの間には、緊密な通婚関係があり、それぞれの伝統領域を強固なものにする一方で、人口の自然増加のために、長期にわたって、次々に中央山脈を越え、今の花蓮や宜蘭に移住した。花蓮に移動したグループをトロック群の人たちは Pribo と呼んでいる。日本人は木瓜蕃と呼んでいたが、1908年⁹、日本当局に絶滅させられた。

日本に統治されるまでは、人々は、広々として人もまばらな土地で、ガヤの規範に従い、伝統的な焼畑耕作と狩猟による自給自足の生活を送っていた。アワとサツマイモを主食とし、捕りつくせないほどの猟の獲物を楽しみ、大自然とともに生きていた。人々にとって、もっとも楽しい時代だったといえるだろう。

第1節 強権の進入—われわれはいったい、誰のために戦うのか

世界のいわゆる文明人と呼ばれる優勢な民族〔原文は「強勢民族」〕が、優れた武器や強大な軍事力をたてに、世界各地の先住民族の土地を併呑し、侵略し、植民地にしていく流れのなかで、われわれセデック族も植民化の潮流の渦に巻き込まれた。人々が昔と同じように、思うままに山林で暮らしていたころ、セデック族の伝統領域は、会ったこともない民族によって、すでに何度も、利己的に譲渡されていた。近代になってアジアを制したばかりで、世界を視野に入れていた大日本帝国は、強い意志と効率的な政府機構を以って、手に入れた戦利品—台湾のすべての土地を効果的に統治し、台湾の山林資源を利用しようと性急だった。新石器時代の生活形態にあったセデック族にとって、強権の到来は、部落時代の終わりと、民族の運命が激変していく始まりを象徴するものだった。

私は1952年、事件の生存者が強制移住させられた清流（川中島）に生まれ、「部落意識」が混乱していた時代に育った。部落の祖父の年代の人たちは、悲壮な霧社事件を経験して幸いにも生き残った人たちだった。ふだんは言葉少なかったが、よくひとりで悲しみに満ちた伝統の古い旋律を口ずさんでおり、しばらく前にこの世を去った肉親を思い、生まれ育った故郷をなつかしんでいるようだった。老人たちの額にある刺青は、われわれのエスニックグループを示す伝統的なしるしだった。

部落の両親の世代の人たちは、日本統治時代に生まれ、日本による6年間の国民小学校の教育

を受けた。そのため、清流部落には、遠くフィリピンやニューギニアなどで、「天皇」のために戦い、生き延びて故郷に戻ってきた「高砂義勇隊」もいた。彼らは、ふだんは日本語で会話をしており、日本名で呼び合い、日本の歌や軍歌を歌っていた。

私たち、戦後生まれの世代は、国民政府の党国教育を受けたが、教師が不足していたので、小学校を卒業しても国語〔北京語〕を流暢に話せず、民族の言葉で話をしており、その言葉には、両親たちがいつも使っているセデックにとっての外来語—日本語が混じっていた。台湾はちょうど軍事戒厳期にあたり、外部の人が部落に入るには「入山証」を申請しなければならず、検査所もあって、出入証をチェックしていて、部落はさながら国の中の国のような感じだった。全国に大陸反攻や大陸同胞を救おうという軍国思想が満ちており、政府は救国教育を強化し、従軍して国に尽くすよう呼びかけていた。わずか十年余りのあいだに、部落の青年たちは次々に繰り上げ入隊をしたり、軍隊への残留を志願したりした。学生はペンを捨てて従軍し、士官学校や軍事学校への進学を名誉とした。これもまた、軍国主義政府の愚民政策で、日本時代の高砂義勇隊の焼き直しだった。われわれセデックはいったい誰のために戦うのか、本当にわからなかった。

第2節 「モーナの遺体」を故郷に迎える—民族の歴史にはじめて涙する

日本と中国という二つの強大な文化に蹂躪され、われわれセデック族の伝統文化はかつてない災厄に見舞われた。それまで信じてきたウツフの宗教観は、統治指導者に対するわけのわからない崇拜にねじ曲げられてしまい、部落意識は統治者に対する国家意識に転落してしまった。部落の三つの世代は、育った環境と背景がちがうことから、その意識形態が歪められ、そのために部落意識も変質し、崩壊しかかっていた。しかし、当時は教育がそれほど普及しておらず、交通も不便で、人々の心は純朴だった。部落での生活は昔と変わらず、部落でお祝いの宴会があるたびに、モーナ・ルーダオ *Mona Rudo* のただひとり生き残った娘、マホン・モーナ *Mahung Mona* が部落の女性たちを率いて歌を歌い、伝統的な歌や踊りを披露した。清流部落に強制移住させられたのち、マホンは再婚したが、子どもに恵まれなかったので、私の叔母¹⁰を養女にしており、私の家と彼女の家との関係はたいへん強かった。

曾祖父¹¹はロードフ *Drodux* 社の頭目で、事件後は川中島社の人たちの精神的な指導者になった。祖父¹²は国民政府に任命された第一期の村長だった。地方の公務員や幹部は、部落に関することでは祖父にいつも意見を聞いて、業務を円滑に進めようとしていたことを記憶している。少年時代、私は祖父について山へ狩りに行き、狩りの技術と狩りのガヤについて学び、時には祖父が昔のことを話すのを聞いた。また、部落の祝宴のあとでいつも、はじめは楽しそうだった女性たちが、悲しい歌を歌うのを耳にし、また、酒を飲んだ男たちが言い争うのを聞いて、いつも知れず、祖父の年代の人たちにはそれぞれ、自分の部落があったのに、ともに悲惨な事件を経験したことを知るようになった。しかし老人たちは、自分たちを悲しませた思い出を話すことを望んでおらず、また、後代の子孫に新しい未来があることを願って、年配の人たちは霧社事件について話さないようにしていた。それで私たちは、事件があったことを知ってはいたが、その内容

については知らなかった。

1973年10月、私は幸運にも年配の人たちとともに、モーナ・ルーダオの遺体を迎え、霧社に運んで埋葬した¹³。モーナの遺体は搜索の末、1934年に発見されたが¹⁴、日本当局はしばらく埔里能高神社（今の埔里仁愛幼稚園）に収容して、当時の川中島の老人たちに確認させたのち、台湾大学人類学科があった考古館に移し、研究資料に提供していた。当時、日本の警察に指名されて遺体の確認に協力したのは、主として、モーナの家族でただひとり生き残ったマホン・モーナと、抗日蜂起した六つの部落でわずかに生き残ったロードフ社の頭目バガハ・ボッコハ Bagah Pukuh〔前述、著者の曾祖父〕とマヘボ Mehebu 社の副頭目のひとりだったモーナ・シネ Mona Sine、そしてその他の抗日六部落の老人たちだった。

当時、国内のニュースメディアや新聞や雑誌はどこもモーナの遺体の霧社への帰還と埋葬について、広く報道した。専門家や学者たちも事件のいきさつについて文章を書き、論述した。部落の祖父母の年代の人たちはたちまち、記者や学者たちが競って取材する対象となった。老人たちは国語〔北京語〕がわからなかったので、私も道義的にも断れず、間にたって通訳をした。

モーナの遺体の故郷への帰還と埋葬について言えば、国民政府が台湾に移ってから28年もたつて、ようやく埋葬されたわけで、私は当時、個人的にはひどく釈然としないものを感じた。また、政府がわれわれ原住民の歴史や文化を尊重しないことをたいへん残念に思った。ガヤによれば、集団で出草するのは意識を共有することであり、成功であれ失敗であれ、人々はそれをともに分かち合い、受けとめる。ウツフを信ずるほかは、セデック族にはかつて、個人崇拜はなかったし、過去の失敗についてふれることもほとんどない。記念碑の建設¹⁵は、すべての統治者は仁政を行わねばならないという警鐘とすべきだろう。

台湾大学の三年生の時、私は叔父の劉忠仁¹⁶（マホンの娘婿）とともに、台湾大学の考古館へ行って、バキ・モーナ baki Mona（バキは目上の人の意味）の遺骸を受け取り、6時間近くかけて車で霧社に戻った。その間、私はずっと、祖母が話していた、その時もなおモーナの左手にはめられていた銀の腕輪と、かたわらに置かれた二振りの獵刀を見つめていた。刀の鞘には、首を狩った相手の髪がつけられたままになっていた。かつては中央山脈に雄を称え、人々をふるえあがらせた民族であり、狩りの名手だったが、動物のように日本の軍隊と警察に捕らえられて殺された。狩られる対象となり、悲惨な運命をたどった。私ははじめて、自分の民族がたどった歴史を思っ涙を流した。そしてこのとき、タブーを破り、60歳を過ぎていた祖父たちや老人たちに、霧社事件についての記憶をたずねて、セデック族の歴史を記録しようと決意した。

第3節 「姉妹が原事件」と「和蕃結婚」政策

日本が埔里に進駐する前は、セデック族と平埔族は同じ南島民族〔オーストロネシア族〕として、緊張した関係にはあったが、時と場所を定めて物々交換の経済活動を行っていた。平埔族のなかには、商売や行き来の便宜のために、パーラン Paran 社の女性を娶って、セデックの言葉に精通するものもあった。ガヤでは、われわれセデック族は婚姻による親族関係をたいへん重ん

じており、それぞれの部落は娘婿に、商売や交易の援助を無条件に与えていた。日本人は埔里に進駐すると、霧社地区の各エスニックグループの部落の状況と部落間の関係を把握し、迅速かつ効果的にわれわれの伝統領域を統治するために、清朝が平埔族を統治した歴史の先例にのっとり、頭目の家族と婚姻する「和蕃政策」を進めた。近藤勝三郎¹⁷とセデック族最大の主力部落であるパーラン社の頭目の娘の結婚はその一例で、この婚姻関係を通して、日本人はセデック族の動静や武装戦闘能力を探っていたのである。

その後、日本の軍隊と警察は少しずつ霧社地区への前進を始めた。1901年、観音山一帯で、われわれセデック族とはじめて交戦したが、日本側が敗れて撤退した。1902年の「人止関の役」で、日本側は再度、惨敗して、人止関の外に退けられた。人々はこの名も知れない侵入者を、赤い縁がある軍帽をかぶっていたことから、タナトゥヌ **Tanax Tunux** と呼んだ。タナは赤色を、トゥヌは頭を意味し、直訳すれば「赤い頭」である。これが、われわれセデック族が日本人を今でも「タナトゥヌ」と呼ぶ由来である。日本側は人止関の外へ退けられたことを潔しとせず、霧社地区に対して経済大封鎖を行って、塩や鉄器などの生活物資が山地に入ることを厳しく禁じた。このため、セデックの人々はひどく不便な生活を送らざるを得なかった。一方、日本人は霧社地区に進駐するための陰謀をひそかに進めていた。生活物資の交易を再開するという名目で、卓社大山の奥深くに住んでいたブヌン族を使喚して、セデック族との境界に交易の場を設けさせ、異民族に嫁いだセデック族の女性¹⁸を派遣して、交易に来るようセデック族を誘わせた。セデックの人々は、日本人がしかけたワナとは気づかず、百人あまりの戦士が約束どおり物を持って、交易に出かけた。飲酒に慣れていない男たちは、ブヌンの勇士が熱心に勧めるので、楽しく日本酒を飲んで酔ってしまった。そこへ周囲で様子をうかがっていたブヌンの勇士たちが、日本人警察官の指揮のもとになだれ込み、セデックの人たちを殺害した。当時の老人たちの話によれば、この九死に一生のワナから、なんとか逃れて部落に戻ったものは、5人もいなかったということである。日本人はこの事件を「姉妹が原事件」¹⁹と呼んでいるが、実際には「毒（酒）殺事件」としなければならない。この事件について、部落の老人たちは誰もが、この事件の最大の功労者は、パーラン社で最も信頼を得ていた娘婿の近藤勝三郎だと言っている。歴史にかつてなかったことだが、またたく間に、百人余のセデックの青年や壮年の男たちが敵に首を打たれ、武器をすべて奪われた。約束どおり交易に赴いた男たちの90%以上が、パーラン社の男たちだった。悲しみの声に満ちたパーラン社の惨状に、セデック族の誰もが嘆き悲しんだ。悲しい報せが伝わると、夫を突然失って、自殺する女性たちも多く出た。セデック族で最大の部落だったパーラン社の下部落²⁰は、この事件のせいで、部落がなくなってしまうほどだった。この事件ののち、日本の軍隊と警察は一人の兵も失うことなく、順調に霧社を占拠した。「蕃日結婚」によって、狼を部屋に引き入れたことで、われわれの頭目は義に背くようにしむけられ、伝統領域の扉が大きく開かれることになった。

その後、近藤勝三郎はホーゴ **Gungu**²¹社の頭目²²の妹のオビン・ノーカン **Obin Nokan** を娶り、勝三郎の弟の近藤儀三郎²³もマヘボ社の頭目モーナ・ルーダオの妹のティワス・ルーダオ **Tiwas Rudo** と結婚した。ホーゴ社とマヘボ社は、どちらもセデック族の主力部落で、その頭

目は各部落に、首狩でその名を知られていた。このときから、共同で抵抗し、伝統領域を護るシステムが崩れていき、日本人は内山に深く入りこんで部落をひとつずつ征伐することができたのである。

日本の軍隊と警察は、近代的な武器と訓練された軍人や警察官による絶対的な優勢と、主力部落の頭目との婚姻関係をたてに、部落をひとつずつ征伐し、銃を根こそぎ没収していった。セデックの男にとって、銃は第二の生命である。簡単な点火式の火薬銃だが、人々にとって主要な狩猟道具であり、異民族の侵略に遭ったときには、防衛に用いることもできた。銃を没収する際に、日本側は、銃の提出を拒んだ人々を、すべて、その場で殺してしまった。われわれを、動物のように見ていたのだ。例えば、私の曾祖父はロードフ社の頭目だったが、その狩猟団での最もよい仲間は彼の岳父だった。しかし、銃の提出を拒否したために、日本の警察は人々の目の前で彼を射殺してしまった。

日本の警察が内山の部落で行なった征伐は、極めて横暴で荒っぽく、法律など全くなかった。したがうものは良畜として撫し、逆らうものは凶畜として殺した。人々を動物のように見て殺したのだ。日本統治時代の人口統計によれば、霧社蕃²⁴の人口は3000人以上だったが、1912年には1600人余しか残っていなかった。さらに内山のタウツァ群やトロック群はもっと悲惨な状況にあった。霧社蕃の発祥の部落であるタロワン社は、もとは270人余りだった人口が、20余人に減ってしまった。パーラン社は780人余の人口が400人余になってしまい、タカナン社は400余人が50人余に、カック社は300余人が100人余になってしまった。セデックの人口が急激に減少したことからも、日本の軍隊と警察の残虐さは明らかだろう。これが20年後に霧社事件が発生した遠因のひとつである。

われわれのガヤでは、出草はすべて部落の外で行ない、首を取ったら、さっさと戻って来る。それゆえ、なぜ日本の軍隊と警察が部落に攻め入り、村が減びてしまうほど多くの人を殺すのか、人々には理解できなかった。破壊的な征伐をうけて、部落は次々に「帰順」し、一方、近藤勝三郎と近藤儀三郎は任務を果たすと、霧社地区から姿を消してしまった²⁵。

第4節 牛馬のような使役と横暴な統治

日本の軍隊と警察の数年にわたる征伐によって、部落の男性の数は激減し、銃もほとんどが没収された。日本人は、われわれセデックにはもはや反抗する力がなく、各部落を完全に制御できると思いこんで、高圧的で横暴な手段による統治を続けた。1908年に霧社警察官駐在所を建設し、それ以後、1930年までに毎年、大々的に土木工事を行い、霧社全域の各部落の警察官駐在所や学校、医療所、農業講習所などの施設の建設や、道路や橋の工事などが、次々に非常に勢いで進められた。われわれの伝統領域にある高山ヒノキは、日本人が最も好む建築材料であり、部落の人々はそのヒノキを運ばせるのに格好の労働力だった。人々は毎年、大木を伐採して運び出したが、伝統的な祭儀活動は禁止され、農業や狩猟も続けることがむずかしく、生活は激変した。人々は言葉にできないほど苦しみ、反抗の心が年々生まれ、大きくなっていった。

1911年、日本当局はセデック族の各部落の頭目を日本観光に連れて行き、日本国内の国防施設を見学させ、日本は人口が多く、武器も性能が高く、殺人を専門にする家（軍校）もあることを実感させた。そのため、頭目たちは、青壮年の男たちの、日本人を殺そうという企てを毎年、抑えつけてきた。老人たちは、われわれはすでに多すぎるほどの人が死んでしまい、もはや反抗できない、とも言ってきかせた。しかし、頭目たちは、日本観光の体験から、日本国内の警察官や軍人はたいへん親切で礼儀正しかったと伝えた。それなのに、部落にいる警察官はなぜあんなにえらそうで横暴で理不尽なのだろうか。

日本人は、セデックの子どもたちを近代化した皇民に育て上げようと教育したが、実際の部落の生活では、警察は高圧的な統治手段をとって、人々を年中、奴隷のようにこき使い、彼らの親たちをわけもなく罵っていた。公用のためにつかひに出されることも多く、人々の恨みの声が至る所で聞かれ、日本人を殺そうという思いが消えることはなかった。民族の伝統を残すために、子どもたちに集団で学校を休ませ、山の中に隠して刺青を入れて抗議することまでした。しかし日本人は動じることもなく、横暴な統治を続けた。

第5節 事件を経験した人々の記憶の連繋

1920年、セデック族の反抗の企てが発覚した。日本当局はこれを厳しく訓戒し、さらに、反抗しようとする秘かに企てた部落の頭目と勢力者を拘留した。ところがこのとき、北のタイヤル族のサラマオ Slamo 地区²⁶で日本人警察官殺害事件がおこった。日本当局は能高郡（現、仁愛郷）内の、同じくタイヤル族に属するマレツパ Mlepa、ムカブーブ Mkbubul、マカナジ Mknazi、マシトバオン Mstbon などの部落²⁷の人々を使喚して、日本人警察官が指揮する鎮圧行動に動員した。5回にわたって、骨肉相食む凄惨な戦いが繰り返されたが、制圧はできず、ついにはマシトバオンの頭目が戦死したため、人々は出動を拒否した。そこで日本当局は、反抗を企てたとして拘留していた部落の人々を脅迫し、征伐に動員した。セデックの各部落は、日本人警察官に画策されて、ガヤに背く征伐行動に次々に赴き、出草の規模を拡大し、伝統的なガヤの出草の目的はくつがえってしまった。

その後も、大規模な土木工事のための奴隷のような使役は増える一方だった。日本人警察官は毎年、工事完成の祝宴に酔いしれて、人々の長年にわたる苦痛を無視していた。1928年、さらに埔里の武徳殿を建てる大工事のために、われわれセデック族のすべての労働力を動員し、守城大山²⁸で木を伐採し、製材させて、20km 余り離れた埔里へ運ばせた。老人の話では、われわれセデック（霧社蕃）が山での作業を請け負い、それを受け取って、タウツァとトロックの人たちが埔里まで運んだということである。使役は何年も続き、日本人は、部落の人たちを牛か馬のように見て、何かというと厳しく咎めた。

1930年、霧社の寄宿学校を建てる工事²⁹のために、10km 離れたマヘボ社の奥山の製材地から霧社まで、建築用の木材を担いで運ぶことになった。マヘボはモーナ・ルーダオの部落で、人々はいつもモーナの家へ寄って、20年以上に及ぶ労役の苦しみを訴え、一日も早く、のさばりか

えている日本人を滅ぼして、伝統の生活を取りもどそうと持ちかけた。祖父はそのころ、24歳だったが、こう言っていた。人々はずいぶん前から計画を立てていたが、頭目たちには、日本人は数が多くて残酷だとよくわかっていたので、反対した。しかし、若い人たちはもはや、心のうちの憤りを抑えることはできず、日本人を滅ぼすことはすでに青年たちの共通した認識になっていた。

ガヤの時代には、倫理をはっきりしており、部落に共通することは、すべて、頭目と長老たちが決定していた。日本人が、われわれのガヤを乱したのである。

おりしも、モーナ・ルーダオの長男タダオ・モーナ Tado Mona と次男のバッサオ・モーナ Baso Mona と、えらそうにのさばっていた吉村巡査のあいだで、殴打事件が起こった³⁰。事件後、頭目のモーナが息子を連れて、吉村巡査に謝罪に赴いたが、吉村はこれを受け容れなかっただけでなく、厳しく処罰すると明言した。タダオはかつて、「日本人警察官に捕まるくらいなら、先にあいつらを殺してしまおう」と言っていた。長年にわたって、人々は日本人を殺そうと思っていたが、吉村殴打事件が導火線となった。人々が木材を運ぶ道はマヘボ部落の近くを通っており、日本人絶滅計画は、あっという間に各部落に伝わった。20年余にわたる恨みと憤りがあり、頭目はどうしても、青年たちの必死の決心を抑えこむことができなかった。アウイ・タダオ Awi Tadao³¹は、「事件の前には、毎晩、部落の近くの谷から、亡霊がむせび泣く声が聞こえ、人々は大事件が起こりそうだと予感していた」と話したことがある。そのころ、花岡一郎はボアルン Boarung で教師をしており、子どもたちを連れ、マヘボ部落を通して霧社へ行き、運動会に参加した。親たちは何事もないかのように、子どもたちを彼といっしょに行かせた。

27日の早朝、ロードフ社の人が曾祖父にこう言った。「今日は日本人を殺す日だ。あなたは頭目なんだから、外へ出てどんな様子か、見てはどうですか」。曾祖父たちが途中まで来ると、妹婿であるタダオ・モーナの戦闘隊が、ホーゴ社から出てくるのに出会った。手には日本人警察官の首を下げていたので、曾祖父はこう尋ねた。「Ma namu so kiya di? (どうしてこんなことをしたんだ)」。青年たち (riso) はついに、20年余にわたって耐えてきた屈辱を晴らす大出草に立ち上がったのだ。

1930年は、日本人が霧社地区を占拠してからすでに27年たっており、20年余りの皇民教育によって、かなりの数の中堅幹部が育って、部落の頭目の指導者としての伝統的な地位は、形ばかりのものになっていた。ふだんから警察が張り巡らしていた緻密な情報収集網も、人々の恨みが深く、心も離反していたために、機能しなかった。日本の警察は、セデックの人々が奴隷のように使役されるのもう慣れてしまった、と自信を持ちすぎたのだろうか。それとも、毎年手柄を立てて昇級する夢に溺れて、反省する力が全くなかったのだろうか。

もし日本人がわれわれセデック族を少しでも尊重して、人々をひどく差別し（その頃は、まだわれわれを、蕃人、不良蕃、凶蕃と呼んでいた）、労働力を過度に搾取するようなことがなければ、この悲劇は避けられたにちがいない。人々は、たとえ死んでも、毎年、労役に駆りだされるような日々を過ごしたくなかったし、毎日、横暴でえらそうな日本人警察官と向き合いたくなかったのだ。事件が起こる前、自分の民族の人を裏切って、日本側にこの空前の大出草を密告し

ようとする人は、一人もいなかった。実際に、運動場での日本人襲撃では、労役に出たことのある青年たちがみな、その壮挙に加わり、駐在所攻撃まで行った。日本人は反日の事態が拡大するのを恐れ、すぐさま策をめぐらし、追究はしなかった。そのほうが「蕃を以って蕃を制す」という手なれたやり口を用いやすいからだった。

セデックの人々は部落の穀物倉（repun）に自ら火を放つと、マヘボ社に集まり、死を決して戦う決意を表わした。最初に日本軍を迎え撃ったのは、近藤勝三郎が二度目に姻戚関係を結んだホーゴ社（Hogoh）の頭目のタダオ・ノーカン Tado Nokan で、彼は勝三郎のアネ ane（妻の兄弟への呼称）だった。タックダヤの最初の部落であるタロワンの戦いでは、日本人は高性能の武器や大砲で攻撃したが、人々は勇敢にこれを迎え撃った。この戦いで、頭目のタダオ・ノーカンは、民族のために生命をなげうって、壮烈な戦死をとげたが、また、日本軍に、われわれセデック族の白兵戦における勇猛さと強さや、死を恐れない強靱な戦闘力を思い知らせたのである。

また、Butuc（一文字高地³²）の戦いで日本軍をほぼ全滅させたのは、近藤儀三郎の妻の実家、すなわち、モーナ・ルーダオの長男タダオと次男のバッサオが率いる勇士たちだった。この戦いで、バッサオは日本軍の銃撃を下あごに受けて負傷した。バッサオは他の人たちに迷惑をかけるために、自分の首を打ってくれるように頼み、その場で兄のタダオが弟の首をはねた。事件の際には、セデックの人々は、医療設備もなく、重傷者の多くは、味方の戦力を削がないようにと、自ら生命を絶った。この戦いは、日本人にわれわれセデック族が森林戦法に長けており、神出鬼没で、いつも姿を見せずに敵を殺すということを認識させた。われわれは誰もが、日本軍は機関銃や大砲、飛行機などの優勢な武器がなければ、われわれの攻撃にひとたまりもないだろうと思っていた。

人々にとって、ただひとつ、どうにも手が出ないのが、日本軍の飛行機だった。日本軍の飛行機がはじめてマヘボの上空を飛んだとき、部落の人たちはもの珍しそうに空を飛ぶ家（飛行機）を眺めていた。飛行機が再び空に現れたとき、突然誰かが「あいつの『子ども』が落ちてくるぞ」と叫んだ。たちまちゴッという音が響き、人々は粉々に吹き飛ばされた。「子ども」は爆弾だったのだ。こうして人々は、日本軍の新しい武器の殺傷力を認識したのだった。日本軍は森林戦がうまくいかなかったので、これまでもよく用いてきた「蕃を以って蕃を制す」というあくどい手法をとることにした。毎日、日本側に協力する数百人の人々を「襲撃隊」に組織して、絶対的な優勢でわれわれを掃討し、包囲し、またたく間に成果をあげた。日本側はこのあくどいやり口で、居ながらにして漁夫の利を手にしただけでなく、人々のあいだに深い恨みの感情を残した。

第6節 人々の心を引き裂いた「蕃を以って蕃を制す」策略

「蕃を以って蕃を制す」というあくどい手口に、人々は驚きに打ち震え、憤りをおぼえた。同じように日本人から20年以上にわたっていじめられ、事件前には行動をとると同意していたのに、なぜ日本側の寝返り戦略が成功したのだろうか。マヘボ社の呼びかけに応じて、日本人

と死をかけた戦いを続けている六つの部落以外の人々はみな、日本側について協力するようになり、蜂起した人々はいっそう窮地に追い込まれた。ガヤでは、同族は互いに首を打ち合ってはならない。取ってきた首に応じて論功行賞をするようなこともかつてなかったことだった³³。今でも人々は、あれは日本人に迫られ、そそのかされたためだったと信じている。飛行機からの爆撃以降、女性と子どもたちはマヘボ溪上流の谷にある岩窟へ避難した。飢えと寒さが迫る冬で、老人や少年が外へ出て食べ物を探すのに頼るのみだったが、食べ物を探す人たちも襲撃隊の首狩の対象となった。

タウツァ襲撃隊のパワン・ナウイ Pawan Nawi は、ボアルン社の近くの畑を掃討している時に、木に登っていたわれわれの戦士を撃ち落した。しかし、首を取ろうとしたところ、驚いたことに、それは実の弟だった。マヘボ岩窟にいた人たちは、日本側に協力する襲撃隊が、畑に避難している老人や子ども、女たちを探し出して首を取っていると聞いて、誰もがひどく憤り、耐え難い思いをした。

ロードフ社のポホク・ワリス Pukuh Walis³⁴は、ホーゴー社とロードフ社の12名の勇士を率いて、日本軍の厳重な封鎖線を突破し、ロードフの近くに戻り、日本側の襲撃隊を迎え撃ったが、見晴農場の近くでタウツァ・トンバラハ Toda Tnbarah 社頭目のタイモ・ワリス Temu Walis から54名の襲撃隊に追撃され、ハボン Habun 溪の支流のトブヤワン Tbyawan へ逃げ込んだ。後ろは谷の絶壁で、道を絶たれたので、ポホクたちは絶壁を背に戦うしかなかった。われわれの12人のうち、ワリス・マホン Walis Mahung は中央の高い位置に立っていたが、襲撃隊にいた兄がそれを見つけ、「弟を撃たないでくれ」と大声で叫んだ。激しい銃撃戦が始まったが、この戦いに加わっていたアウイ・タダオは、「叔父のポホク・ワリスは、銃撃戦の時には、左手の指に一度にいくつもの銃弾を挟んで、すばやく銃に装填した」と語っている。われわれの方が地理的に有利な位置にあったため、襲撃隊は頭目のタイモ・ワリスをはじめ、10人以上がその場で戦死し、10人余が重傷を負った。この戦いでは、われわれの12人には死者は出なかったが、みな黙りこくり、重苦しい雰囲気、戦いに勝って敵を退けた喜びは全くなかった。戦死したのが、よく知っている人々と尊敬を集めていた頭目だったからだ。彼らは言葉もなく、天に問いかけるだけだった。「どうして日本人じゃないんだ」。12人は、それぞれ自分の畑に戻り、骨肉の殺しあいや、家も家族も失ったことを思っていた。やがて、勝って帰ってきた戦士が自殺した銃声が響いた。首つり自殺をした者もあった。

岩窟で女性たちや子どもたちを護っていたパワン・ナウイ³⁵は、「ポホクたち、12人が岩窟から出て行ったあと、彼らの部落の女たちは、岩窟の林で、集団で首吊り自殺をした。あまりの重さに、枝が折れてしまった木もあった」と語っている。ガヤによれば、出草はいつも成功するわけではない。出草の時には、最後の別れのように家族に別れを告げるのだ。岩窟の女性たちや子どもたちは、すでに飢えと寒さに苦しんでおり、出草する男たちが後顧の憂いなく戦えるように、集団で首吊り自殺をした。これは彼／彼女たちが生命を終わらせるために、いつも選ぶ方法である。

事件から60年たって、パワン・ナウイは76歳という高齢の身で、わたしやダックスたち4人を

岩窟へ連れて行ってくれた³⁶。途中、曲がりくねった小道を登るのはたいへんだったが、山も谷も昔と変わらなかった。その景色を眼にして、パワン・ナウイ老人はひどく悲しい思いをした。

まとめ—「ウットフとガヤの部落」対「日本の天皇と国家」—

人々は、霧社地区で日本人から27年にわたる高圧的な統治を受け、最後にはガヤの集団出草の方式をとって、その煉獄のような生活を終わらせた。1931年5月6日、事件で生き残った298人が川中島社（清流部落）へ強制移住させられた³⁷。日本警察の長期にわたる極秘調査の後、1931年10月15日、ふたたび、部落の15歳から55歳までの男子23人が逮捕された。彼らは埔里の郡役所の留置場で残虐な刑を受け、その後、1932年3月17日、埔里郊外の荒野で生き埋めにされた。日本人はこうして、われわれに対する清算を終えたのである。

霧社事件では、われわれセデックの1000人余の生命も犠牲になり、人々の財産や土地もすべて失われた。事件後、日本人は統治の方法を改め、原住民族を「高砂族」と呼ぶようになったが、しかし、わたしたち霧社蕃の部落は、霧社地区から完全に消えてしまった。人間の進化や発展の立脚点はまちまちで、それぞれの民族の生活様式や文化習俗、価値観の差は非常に大きい。セデック族のウットフとガヤの部落が、日本の天皇と国家に直面し、それぞれが自らのガヤを行った結果、事件が発生したのは必然的なことだった。しかし、その是非がどうか、立派なことだったかどうかに関わらず、また、人に誇示するようなことがあったとしても、三、四十年にわたって事件を生き延びた老人たちと共に暮らしてきた間に、祖父母の世代の人たちが、孫の世代に、事件のあとに残った恨みについて教えるようなことは全くなかった。彼らはただ、「日本人はやりすぎた」と言うだけだった。

われわれセデックの三つの方言グループは、日本人が去ってからは、かつて日本人に操られたために起きた不愉快な事件のことを忘れ去って、昔どおりに頻繁に通婚しており、手を携えて未来を創ろうとしている。

私たちの今の民族の名前は「セデック族」である。

最後に、日本台湾学会が、霧社事件の遺族であるタクン・ワリス・グルバン Takun Walis Gluban に、皆さまとお眼にかかる機会を与えてくださったことに、心から感謝いたします。また、天理大学の下村作次郎教授、国際交流基金日本語教育専門員の魚住悦子先生、京都大学の駒込武教授、鄧相揚先生、ダッキス・パワン Dakis Pawan（郭明正）の指導と激励にお礼申し上げます。

みなさん、ありがとうございました！
お元気で、またお眼にかかりましょう！

Muhuwe namu bale !

Knbeyax !

【訳者附記】

以下の注は、訳者が付したものである。ただし、本文中の () 内の注は著者が、[] 内の注は訳者が付したものである。脚注のうち、名前に関するものは、「民族名のカタカナ表記、民族名のローマ字表記、中国名(生年-没年)」を示す。これらの資料は、簡鴻模、依婉・貝林、郭明正合著『清流部落生命史』(台北・永望文化、2002年)を参照した。なお、本訳では、これまでの文献資料との整合性を考慮して、カタカナ表記は日本側資料にあわせた。

- 1 実際の発音は、セジャツ(ク)。本訳では、これまでの文献資料との整合性を考慮して、セデックと記す。なお、発音はタックダヤ群、タウツァ群、トロック群で異なる。
- 2 実際の発音は、トータ。
- 3 セデック族は、その方言によって、タックダヤ群、タウツァ群、トロック群に分けられる。
- 4 セデック族は、日本統治時代からタイヤル族の一部とされてきたが、長年にわたる正名運動の結果、2008年4月、政府から独立した民族と認定された。
- 5 1814(嘉慶19)年の郭百年事件。漢民族の郭百年らが埔里盆地に集団で侵入し、埔里社の原住民を殺戮した。漢民族は放逐されたが、埔里社の原住民は大きく勢力をそがれたため、民族としての命脈を保つために、西部平原から、ホアニャ、タオカス、バゼツヘなどの平埔族を埔里盆地に入墾させた。
- 6 部落社会の時代。
- 7 原文は「族群」。
- 8 「オットフ」とも表記される。
- 9 1908年12月、花蓮地域で起こったチカソワン(七脚川)事件。七脚川社のアミ族がタロコ族と連携して武装蜂起したが、日本軍に鎮圧されて多くの犠牲者が出た。
- 10 ルビ・マホン、Lubi Mahung、張呈妹(1941-)。
- 11 バガハ・ポッコハ、Bagah Pukuh、邱烈(1883-1950)。
- 12 タクン・バガハ、Takun Bagah、邱安田(1907-1985)。
- 13 『清流部落生命史』(上記)に収録された著者の口述歴史(115頁)を参照のこと。なおこの口述歴史は、本学会のシンポジウムの関連資料として訳出した。
- 14 モーナ・ルーダオは霧社事件発生後、深山で自殺し、その後数年たって、遺体が発見された。
- 15 抗日霧社事件の記念碑は1953年に建設された。また1974年、記念碑園内にモーナ・ルーダオの墓が造られた。
- 16 パワン・ネユン、Pawan Neyung、劉忠仁(1938-)。
- 17 近藤勝三郎は日本の台湾領有直後に埔里へ入り、商店を営むかたわら、原住民族の住む山地に出入りして、原住民族の言語や文化に精通し、日本当局のために働いた。
- 18 近藤勝三郎と結婚したパーラン社の女性を指す。
- 19 1903(明治36)年10月。
- 20 パーラン社には上パーラン、中パーラン、下パーランとムヤサン(ムヤサン)の部落があった。鄧相揚「日本統治時代の霧社群(タックダヤ)の部落の変遷」『天理台湾学会報』(第17号、2008年)参照。
- 21 セデック語ではグングと発音するが、日本人はホーゴ社と呼んだ。
- 22 タダオ・ノーカンを指す。
- 23 近藤儀三郎は結婚当時、マヘボ駐在所の巡查部長だった。
- 24 タックダヤ群は日本統治時代、霧社蕃と呼ばれていた。
- 25 近藤勝三郎は1918年、霧社を去った。弟の近藤儀三郎は1916年、花蓮に転勤した後、行方不明になり、妻のディオス・ルーダオがひとり残された。
- 26 現在の台中県和平郷梨山、タイヤル族スコレク系に属する。
- 27 マレツバ、ムカブーブは現在の南投県仁愛郷力行村にあり、マシトバオン、マカナジは仁愛郷發祥村にある。すべてタイヤル族スコレク系に属する。
- 28 守城大山は霧社の西北、埔里の東北に位置する。標高2420m。
- 29 霧社尋常小学校の寄宿舎改築工事を指す。
- 30 1930年10月7日、吉村巡查が、マヘボ社の婚礼の宴を通りかかった際に、献杯しようとしたタダオの手を不潔だとして打ち、激昂した兄弟に殴打された事件。

-
- 31 アウイ・タダオ、**Awi Tadao**、曾少聰（1915-1990）。
- 32 原文は「十字高地」。
- 33 日本側は、誡首された抗日側の人々の首に、頭目・勢力者は200円、男性100円、女性30円、子ども20円の賞金を出した。
- 34 ポホク・ワリス、**Pukuh Walis**、(1893-1931)。『清流部落生命史』（上記）には、1931年、「霧社事件的後続清算」によって死亡したとある。また、林えいだい著『霧社の反乱・民衆側の証言』（新評論、2002年）には、ポホク・ワリスは川中島移住後、川中島を脱走したが、霧社とホーゴ社の間で警察に捕まり、霧社分室で拷問されて死亡したとの証言が収録されている。
- 35 パワン・ナウイ、**Pawan Nawi**、蔡茂琳、(1915-1994)。
- 36 『清流部落生命史』（上記）に収録された著者の口述歴史（118頁）、注13を参照のこと。
- 37 川中島に強制移住させられた6部落の歴史や移住後については、ダックス・パワン（郭明正）「**Kari Alang Nu Gluban**（清流部落簡史）」（『清流部落生命史』所収）に詳しい。

